

～日置町の歴史探訪 ⑤～



峠山窯跡出土品



峠山窯跡全景

峠山須恵器窯跡

峠山須恵器窯跡（県指定史跡）

は油谷町との境界に近い峠山にあつて山の傾斜面を利用した半地下式登窯である。一昨年県の協力により発掘調査が実施されほぼその全容が明らかになった。さて近年各地で考古学分野における古墳発掘が行われそこには刀剣、甲冑等の鉄製品や勾玉菅玉の装飾品そして多量の土師・須恵器の遺物が出土するのである。その時代（今から約一、五〇〇年前）須恵器という新しい陶質土器が出現しているがこの技法はどこから伝えられたのかその源流を辿れば中国であろう。然し直接的な影響は朝鮮三国時代の百濟・新羅と考えられる。それは彼の地の遺跡の出土品が日本各地で発掘される須恵器と区別できない程酷似しているからである。古墳時代後期は中国、朝鮮との交流が頻繁に行われており佛教が伝導されたのもこの頃である。従つて当然のように多くの文化技術も導入され焼物の工人達も渡来しその技術を駆使したと考えられる。今までの赤焼土器（土師器）とは全く違う長石を多量に含む耐火度の高い粘土を選び穴窯（登窯）で千度以上の高温で焼くそれ

も「燻べ焼」という新しい焼成技術である。日本書紀の雄略記に「新漢陶部：遷し居らしむ」という記述があつて焼物の工人を呼び寄せたという。考古学的には日本で最初に発見されたのは大阪泉の陶邑古窯群である。この陶邑の古窯が日本最古であるとの確証はないが少なくとも大和朝廷の権力により築窯され又全国に技術伝播されたものと考えられる。さて峠山須恵器窯跡は三号窯まで確認されており坏・壺・甕等が焼かれている。この近郷では美東町赤郷にある末原窯跡群（県指）があるが峠山窯の特徴は海底堆積粘土で作つているために焼成する段階でゆがみが生じる。従つて大型のものや型の整つた製品は困難であつたと思う。祭祀用具や日常雑器としての貯蔵容器、供繕・煮沸の機能を持つ器を作つていたのであろう一号窯は或る日突然燃焼中に停止している。それは恐らく窯の天井部分が陥没したか、又は工人の事故により放棄されたのであろう。ではこの窯はいつ頃の時代に築窯されたのか前述のように大和地方を中心に急速に伝播した技術は全国にその姿を見ることができ

（長門国では直接的に朝鮮との交易によるものか）。従つて峠山窯の土器のみでは判定が難しいと思う。数年前に町境より程近い所に位置する荒人で集落跡が発掘された。そこで祭祀用と思われる「土豚」が出土し当時話題となった。随分以前のことだが長行から「土馬」が出ている。それは総て祭祀用であるが日常雑器としての須恵器も多く出土している。峠山窯はこの地方の焼物の産地として重要な位置にあつたと考えてよい。又それらを更に解明していけば自ずと窯の年代も判明することと思つた。古代から中世にかけて使用された須恵器は日本の焼物史上大きな貢献を果し今日の六古窯といわれる備前、信楽、丹波等は須恵器の流れを持つ。さて逸脱するがこの北浦の長門地域に於ける古代人の足跡を辿れば遺構を見る限り油谷湾から蔵小田更に黒川水系地域と久富、峠山に至り徐々に東へ移行したように考えられる。古代人の賜物は石器や狩猟用具、装飾品もあるがその量からすれば陶質土器であろう。土器は生活の定住化をすすめる文化を高めてくれたのである。

執筆 岡藤 正作